

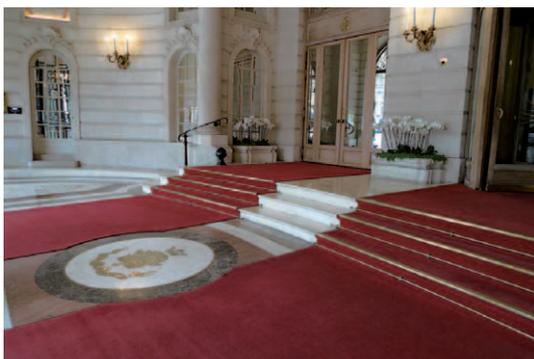
リッツパリ Ritz Paris



“グラン・サンク”、「パリ5大宝飾店」のショーメやブシュロンなどのトップジュエラーが軒を並べるヴァンドーム広場の一角にリッツ・パリがある



正面エントランスにある四つのアーチ部分を飾る純白のサンバイザーが、ひとときリッツ・パリの優雅さを引き出している



正面エントランスと内側玄関ドアの間にホール状の空間が設けてあり、敷かれた真紅のカーペットの間にリッツ・パリのエンブレムが輝いている

バスルームにある水栓カランの蛇口部分は白鳥の嘴から水が出てくる



筆者 小原康裕

ホテルジャーナリスト。
慶応義塾大学法学部法律学科卒。74年
Munich Re入社。85年築地原健株代表
取締役。2001年投資顧問会社原健設立、
代表取締役CEO。JHRCA、日本ホテル
レストランコンサルタント協会理事。
※現在、著者のホームページで「世界のリー
ディングホテル」を連載中。多くの美し
い写真と興味深いコメントで、世界中の
ホテルとそれら関連都市を紹介。
www.jhrca.com/worldhotel

世界にはまだまだ日本人が訪れていないホテルがある。このコーナーではホテルエが知っておくべき「世界のリーディングホテル」を紹介する。これまで多くのホテル紹介本が出版されてきたが、そのほとんどが現地のホテルと事前に取材の連絡を取り合い、プロのカメラマンや通訳、そのほか大勢を連れ立っての大名取材であり、宿泊は省略といったことも多々であった。本連載では、著者自身が長年にわたる個人旅行中に自分の目で感じ取り、コメントを書き込み、自分のカメラで思いのままを撮ってきた写真を掲載する。

※本連載は毎月2・4週号掲載



美しくライトアップされた正面ファサード。純白のサンバイザーにも光が灯り“Ritz”のロゴが美しく映える。パリの心臓部、華やかなヴァンドーム広場の主役が“Hotel Ritz Paris”である事に間違いはない



ヴァンドーム広場に面する客室側はゴージャスなスイートルームが並び



部屋から眺めるヴァンドーム広場とナポレオン記念柱。重厚な二重窓は防弾ガラスになっており、広場側からの発砲テロに備えている



広大な面積を誇るバスルーム。ヴァンドーム広場とは反対側にあり、隣接するフランス司法省の裏庭を窓から望むことができる



多くのタオル類・スリッパが収まったコーナー。タオル・バスローブは淡いローズビーチ色にこだわった厳選の品質を誇示する



天蓋付きの豪華なキングベッド。窓からはヴァンドーム広場が一望できる



GMから届けられたウエルカムアメニティとレター。GMは以前ペンシユラ・ビバリー・ヒルズでお世話になった、Christian A.Boyens氏が着任していた



202号室プレステージスイート「Cesar Ritz Suite」の隣に位置する203号室のスイートルーム。ヴァンドーム広場のナポレオン記念柱を真正面に臨む最高のロケーションだ。隣のフランス司法省と接した角部屋で、リビングとの境目にある重厚なコリント式円柱が印象的である



クラシックで優雅な雰囲気のリビングルーム。暖炉とボンパドール侯爵夫人と思われる絵画が麗しい

世界の主要ホテルを論じる際に絶対に外せない名前と問われれば、ロンドンのサヴォイと共に筆頭格に挙げられるホテルであろう。1889年にサヴォイの総支配人として迎えられ、ヨーロッパというより世界における近代ホテル経営の規範を示したのが、セザール・リッツである。“ホテル王”と呼ばれたセザールは総料理長に現代フランス料理の基礎を築いたオーギュスト・エスコフィエを迎え、自ら創業者兼総支配人としてパリ・ヴァンドーム広場にリッツ・パリを1898年6月1日に開業した。

現在ホテルのある場所は、1705年にルイ14世の首席建築家でフランス後期バロック建築の第一人者であるJ・アルドゥアン・マンサールの設計で建てられた邸宅だ。後にこの建物はグラモン侯爵の手に渡り、この邸宅をセザールが自ら借金をして購入した。経営はセザールが設立したリッツ・シンジケートの別会社、リッツ・パリ・リミテッドが全権を彼に一任する形になっていた。卓越したサービスとエスコフィエが手掛ける料理の評判はまたたく間にパリ名士の間に広がり、ホテルのバーにその名を残したヘミングウェイをはじめ、プルースト、チャップリン、マリーネ・ディートリッヒ、サルトルなど著名な作家、俳優、各国の王族などを顧客に取り込んでいった。中でもココ・シャネルは30年以上も自宅代わりとして住み着き、ここで没している。彼女が内装をデザインした“シャネル・スイード”は現在も当時のまま残されている。

1918年にセザールが没すると息子のシャルル・リッツが後を継いだ。79年にリッツ一族はホテルをエジプトの実業家モハメド・アルファイド氏に売却する。アルファイド氏はセザール以上に理想のホテル造りに邁進し、膨大な金額と営業を続けながら9年の歳月をかけホテルの面目を一新させた。また88年にはオーギュスト・エスコフィエを記念して、料理学校“エコール・リッツ・エスコフィエ”「The Ecole Ritz Escoffier」が設立された。そんなリッツ充実期の97年にアルファイド氏の息子ドティ氏と故ダイアナ元イギリス皇太子妃が、リッツのインペリアル・スイートで食事を取った後にアルマ橋の地下自動車道で運命的な事故に遭遇したことは、いまだに記憶に新しい。

2011年10月18日、突然リッツ・パリ休業のニュースが世界に発信され関係者を驚かせた。翌12年夏より2年3か月という異例の完全休業で、“前例のない改装”が理由だ。同年5月に発表された5つ星を超える“新たな格付け”「PALACE」の認定からリッツが漏れたことに起因すると推測するが、アルファイド氏のホテルにかける情熱から充分理解できる大改装への意気込みである。14年秋に再出発する新屋リッツに大いに期待するとともに、今後もパリを代表するパラスとして世界的評価を保ち続けると信じて止まない。ホテル王セザール・リッツが創業したパリの輝ける星として。

今回はリッツ・パリの後編としてミシュラン2つ星レストラン「L'Espadon」やスパ施設を中心に連載予定。